

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「産婦人科」

信州大学医学部産科婦人科学講座

宮本 強

卒後18年が経過し、自分が産婦人科を選択した理由もおぼろげになってきておりますが、あまり気の利いた理由はないように思います。

私は、大学在学中は野球部に所属しており、6年生(学部4年生)の夏の東医体までは、将来の進路は全く考えていませんでした。医師になりたいというのが子供のころからの夢でありましたが、何科の医師になりたいとまでは考えておらず、性格上は外科(系)であろうと漠然とっておりました。そのころ、熱心に勧誘をいただいたのが、整形外科の寺山教授(当時)と産婦人科の藤井教授(当時)でありましたが、腹部の手術に興味があったことや、話を聞いていると婦人科腫瘍や妊娠・分娩など、意外にも(当時はそんな感じですが)面白い世界が広がっていそうであり、何

より産婦人科医不足で、「お前が必要なんだ」と言われたことから、急に産婦人科を意識するようになりました。元来、長く悩み続けることができない良くも悪くも単純な性格であり、卒業試験開始前の10月くらいには、産婦人科への入局を決めていたと思います。

なぜ産婦人科を選んだか、という明確な理由はなく、多分にノリであったと思いますが、「取りあえずそこ(産婦人科)で頑張る」とだけ決心し、産婦人科に飛び込んだ訳であります。以来、産婦人科一筋に18年間が経過し、手術が好きなおもしろい、婦人科腫瘍を専門にしておりますが、産婦人科の世界は奥深く、未だ深淵には達していません。

最近では2年間の初期研修ローテーションの期間があり、学生の中に進路を決める人はほとんどいなくなり、初期研修中に大いに進路について悩んでいるようです。私も初期研修医や学生から、「なぜ産婦人科を選んだのか」と聞かれることがよくあります。その際には上述のような経過を話し、最後に「科を決めるのはきっかけに過ぎないから、ノリでもなんでもいいが、決めたら兎に角そこで頑張れ」と話すようにしています。

(信大平6年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「脳神経外科学」

信州大学医学部脳神経外科学講座

伊東 清志

小さい頃より、将来“医者で学校の先生にはなるな”と言われて育った私が、いま脳外科医として働いているのに不思議な思いがある。もともとへそ曲がりなのかもしれない。親に言わせると医者は、人の弱みにつけこむ仕事であるそうだ。確かにその考え方に一理はあるなあと、最近思っている。

私が医者になろうと思ったのは、中学校3年生のときである。このような原稿で書くのは、はずかしいが母親がクモ膜下出血で早朝倒れたことがきっかけになっている。朝早くにもかかわらず、急患室のイスに座っている私の前を、あわただしく私服で走っていった人が2~3人いたように思う。その後担当の先生方からICUで手術の説明を伺い、初めて先ほどの走っていた人が脳外科医であることを知った。その後うけた手術も順調に終了し、おかげさまで、母親は病弱ながらも現在でも健在である。

それから、私は医師というより脳神経外科医を目指すようになった。それから周囲の人たちに反対されながらも、医学部に進学し現在に至っている。自分が信じていること、好きなこと、そして興味を持つこと

以外には、あまり関心がなく性格が単純であることも、現在脳外科医である理由の一つである。神経系疾患は奥深い。

いま神経疾患の中でも、脊椎脊髄疾患を受け持たせて取り組ませていただいている。神経系(私が担当している脊髄)には、未解決な話題が多い。頸椎症がなぜ発生するのか今なお明確な解答がないと考えている。単に脊柱管が狭いだとか、動的因子があるからとかいうことを言っているのではなく、椎間板変性、黄色靭帯肥厚、骨棘形成のような生体反応、脊髄の構成要素のうち障害されやすい索路、神経細胞とそうでないものがあるのはなぜかなど未解決な話題が多いと思うからだ。

その一方で除圧あるいは固定という呪縛から脱皮出来ないもどかしさも感じている。

最近医師のキャリアの旬は、若い頃思っていたほど、長くないと感じるようになってきた。昔は“苦しいことでも努力と忍耐で乗り越えろ”といった教えをうけて頑張ってきた気がするが、限られた時間での能率を考えると決して良い方法ではないであろう。私は、母親の病気を通して、神経系の奥深さに触れることが出来た。その“楽しみ”を味わわせていただいていることが、過酷な外科系の診療に携わっている原動力になっている。これからも人の弱みにつけこまず、日々精進し続けていきたいと思っている。

(新潟大平7年卒)